## 逸楽の時

逸楽の時、僕は夢見る
没落の夜の転々とする寝返り
長く続き過ぎたこの穏やかな午後は
今は既に日は傾き始めて影も伸びてゆき
頑なに日の光を拒んできた僕の心を
何故か次の夜明けの薄い赤色へと運ぶ

今この時を楽しまず暗闇にこもって
何故に次の日の陽光の下に楽しみがあるか
幸福の荒野から逃げ出して来ながら
何故に次の荒涼とした原野に堪ええよう
再び日の光を忌み嫌って苦しみ
また没落の夜の寝苦しさを夢見るが関の山

果てしなく満たされぬ心が連なるばかり
逸楽の時にただ、柱廊の彼方を見やり
己の内に潜む何者かに焦心して

理由(わけ)もなく立ち上がる度に

理由もなく忿満を吐き散らすばかり

（これこそが幸福の時よ・・・）

日が傾いてゆく
影が伸びてゆく

(1982.5.18)